

平成 22 年度第 3 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

平成 22 年 10 月 27 日 市民文化課

佐々木委員長、斎藤委員及び早川委員が作成した活動報告書案をたたき台にして、完成に向けて議論を行い、意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

【「文化」と「芸術」の位置付け】

- 「文化を創造する基盤の一つが芸術である」とあるが、一般的には芸術は文化の花であり、方向が逆である。何も無いところに人がいて、社会が生まれ、文化が生まれ、その結晶のような形でアートができてくる。あえて順番をひっくり返しているのならば良いのだが。今既にアートも色々あるし文化もある程度満たされている中で、あえて、芸術性の高さを確保しないと逆に文化の方が廃れていくというような、そのように芸術を考えようという姿勢の表れなら良いのだが。(中津)
- 文化という概念はとても広いもの。文化というものはそれ自体で能動的にできてくるものではなく、芸術や芸能、いろいろな趣味の世界、そういったもののから創造物ができ、その結果が文化として後世に残っていくもの。なので文化という概念はとても広い。芸術はその一つに過ぎない。しかし、芸術が持っている瞬発力は文化創造の基盤整備の重要な鍵を握る一ジャンルである。(蔵)
- 歴史的な見方をすると、人間がいて、文化的なものがあり、その中から芸術的なものが生まれる。しかし、今は順番ではなく、芸術が生まれ、その芸術をベースに新しい文化が生まれ、その新しい文化からまた新しい芸術が生まれる。そう考えると、常に芸術というものが下支えになっている。(早川)
- そうということが伝わる言葉に置き換えましょう。(佐々木)

【「アーティスト」の定義】

- 「アーティスト」の部分を「アルティザン(職人)」とするとわかりやすく

なるのではないか。そうすることで経済的な意味でのアートの産業化が説明しやすくなる。また、そこに思想的なものが加わってくるとアルティザンの作品が芸術に昇華されることになってくる。(新堀)

- 基本にある考えとしては、アーティストとはあくまでも表現に対しては個人的な営みであるが、社会資本として捉えようというのが基本にある。経済価値的にも文化価値的にもどう流通させるかということが産業化ということである。アーティスト自身としては個人的な活動だとしても、それが社会全体としては無形なバリューとして価値のあることである。だから、アーティストを社会共通の財産として行政や市民が支えることが必要であり、全体の財産にもなる。(大平)
- アーティストについての説明を補い、社会資本であるなどいろいろな良い言葉が出てきているのもう一度整理する。(佐々木)

【「アートの産業化」の定義】

- アートの産業化の話は、もともと円卓会議の場では、アーティストの自立・支援というテーマから発生している。しかし、アーティストの自立・支援と声高にそれを言うと、結局、芸術文化という範疇がアーティストの方に特化してしまい、市民文化や市民芸術の方よりも圧倒的にアートの方を大切にするという文脈になっていくと感じた。やりたいのは検証システム作りなどの総花的ではない枠組み作り。そのためのキーワードとしてアートの産業化という言葉を持ってきている。産業化の大きなテーマの一つは循環システムづくりだと思う。受ける側と出す側という明確な双方向の矢印でそれがグルグル回って行くこと。(早川)
- アートの産業化の定義を記載している部分に、これによって期待される効果も記載するべきでは。(阿部)
- アートの産業化の記載部分をもう少しわかりやすくするとよいと思う。阿部委員の言う産業化による効果の説明を加えるともっと生きてくると思う。総花的であるという批判があり、まず検証することが必要であり、そのデータがないという指摘があった。報告書を初めて見た人にとってもわかりやすくなれば。(事務局)

【傍聴者の意見等】

- 「様々な施策が有機的に展開されるイメージを築きあげます。」とあるが、どこに向けての言葉なのか。(傍聴者)
- 市民に向けてである。もともと総花的にならないようにするというのがベースとしてある。そのためにこのような循環システムをつくっている。行政、市民、アーティストという軸をつくることにより、有機的に展開されるということ。(早川)
- アートの産業化がメインになっていて、アートが精神的なものということが消えている。行政、市民、アーティストの枠の中で、アーティストが何か提案したときに受け手となるのが市民だけでは産業にならないと思う。今年、瀬戸内の芸術展に行ったが、人口が少ないこともあり、自分たちで芸術を楽しむというよりは、観光産業の中で働き、その利益を享受しているという印象を受けた。その辺についてどう考えているか。(傍聴者)
- アートの産業化を利益や価値の交換という経済的観点から見たらそういった解釈になってしまう。(早川)
- 無形バリューの話をしながらも落とし所が見えていないということではないか。(佐々木)
- やはり、期待される効果について明確にしていないことが原因だと思う。(早川)
- ここでいう市民とは札幌市民のことだけなのか。そこも整理しなければならない。(佐々木)
- 芸術を産業的観点から進めていこうとすると、本来の芸術的価値は弱まっていくという心配がある。瀬戸内国際芸術展の話も経済的な効果で、むしろ、本来の価値が弱まっているのではないかと感じたのだと思う。こういったことが市民の背景にはあるということを忘れてはいけない。現在は、アーティストは自己犠牲を払うか、一部の企業の支援がないと成り立たない状況。本来の芸術家の生き方に近づけるための基盤を整備するために、一旦、産業化という議論を行っている。(蔵)